

ポートフォリオ学習の可能性と課題

—地域プロジェクト型学習を事例に—

陣内 雄次

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日

ポートフォリオ学習の可能性と課題[†]

—地域プロジェクト型学習を事例に—

陣内 雄次*

宇都宮大学教育学部*

政府の地方創生の旗振りもあり、わが国の大学には地域貢献が強く求められている。そのような中、宇都宮大学教育学部総合人間形成課程「プロジェクト研究」のように、地域で活動しながら学生が学びを深め併せて地域貢献するという地域密着型の授業＝地域プロジェクト型学習が注目されている。本稿では、筆者が担当したプロジェクト研究の受講生を対象に、半構造化インタビュー調査を行い、その結果分析から地域プロジェクト型学習におけるポートフォリオ学習の有用性を検証し、地域に根差した活動を通しての学びのあり方について示唆を得ることを目指した。

キーワード：ポートフォリオ学習、地域プロジェクト型学習、地域づくり、半構造化インタビュー

1. はじめに —背景と目的—

宇都宮大学教育学部総合人間形成課程は、いわゆる「ゼロ免」コース、つまり教員免許を取得することが卒業要件ではない課程である。本課程は、言語文化、地域公共、環境創造、芸術文化、スポーツ健康の6領域で構成される。教育学部家政教育専攻の教員（住居学、まちづくり論）である筆者は、総合人間形成課程の前身である環境教育課程環境教育コースを兼担していたこともあり、環境創造領域の

授業や演習を担当してきた。本課程には必修単位として、プロジェクト研究がある。学生は二年生後期にプロジェクト研究Ⅰ（2単位）を、三年生後期にⅡ（2単位）を受講しなければならない。プロジェクト研究の目的は、「社会との交流や地域への貢献などを通じて、学生の実践力を養成する」ことにある。筆者はプロジェクト研究を地域プロジェクト型学習として捉え、受講生が地域社会の様々なセクターと協力しながら事業（プロジェクト）を成し遂げ、そのプロセスにおいて大学の講義やゼミ、バイト、サークル活動等では得ることができない気づきや学びを深めることを目指した。

一方、政府の地方創生へのシフトの中、わが国の大学には地域貢献や地域づくりを先導するという重しが大きいのしかかっており、近年、地域に根差した演習に力を注いだり、地域密着型の新たな学部を開設する大学が見られる。プロジェクト研究は、ある意味、このようなトレンドを先取りしていたとも言えるであろう。

総合人間形成課程は学生募集停止が決定しているが、プロジェクト研究での実践の蓄積は、わが国の大学に期待されている地域貢献やその活動からの学びのあり方に対して、一つの方向性を示すものであると考えられる。以上の背景を踏まえ、本稿では、筆者が担当したプロジェクト研究（地域プロジェクト型学習）におけるポートフォリオ学習¹の効用と

表1 総合人間形成課程の6領域

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・人間発達領域：人間の発達領域のあり方や内面の理解について学ぶ・スポーツ健康領域：スポーツや健康を通して健やかな身体成長のあり方を学ぶ・芸術文化領域：芸術活動を通して、人間の情動的成長のあり方を学ぶ・環境創造領域：環境学の視点から地域創造のあり方を学ぶ・地域公共領域：地域社会のあり方を考えながら社会での諸活動について学ぶ・言語文化領域：言語の成り立ちや言語を通して文化について学ぶ |
|--|

資料：教育学部ホームページ

[†] Yuji JINNOUCHI*: An Analysis of Portfolio Learning: A Case Study of Community-based Project Curriculum

* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: jinnouhi@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

課題について検証し、地域に根差した活動を通しての学びのあり方について示唆を得ることを目指した。このため、半構造化インタビュー調査を実施した（詳細は後述）。

2. プロジェクト研究について

総合人間形成課程の必修単位の一つとして、プロジェクト研究がある。学生は二年生の後期にプロジェクト研究Ⅰ（2単位）を、三年生後期にⅡ（2単位）を受講しなければならない。学生は所属する領域に関係なく、総合人間形成課程の教員及び協力教員が担当するプロジェクト研究を選択することができる。また、Ⅰ、Ⅱの連続性は必須ではなく、3年次に変更することも自由である。一方、担当する教員は自由にプロジェクトの内容を設定できる。また、プロジェクトの進め方、評価の方法も教員に一任されている。ただし、「社会との交流や地域への貢献などを通じて、学生の実践力を養成する」ことが求められていることから、受講生が地域社会との接点を持つことが重要である。

筆者が担当しているプロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ（以下、陣内プロ研）の概要を述べる。受講者数は毎期20名前後であり、受講者は複数のメインプロジェクト、サブプロジェクトからそれぞれ一つを選んで所属する。3～4のプロジェクトを同時期に進めることになる。メインプロジェクトはチームで進めることからリーダーなど役割分担を決め、こちらを中心に受講者は取り組むことになる。サブプロジェクトは個人ベースであり、先方の活動等の補助的な役割という位置付けである。プロジェクト研究は後期（10月～2月）の授業であるが、陣内プロ研では4月に全員参加のガイダンスを行う。4月～9月は助走期間であり、10月から本格始動となる。4月～9月の間は個別に学生の相談を受け、10月から月1～2回程度の全体ミーティングを実施する。その際、進捗状況の確認、意見交換、パーソナルポートフォリオ、文献レビューの提出と返却を行う。提出したパーソナルポートフォリオ、文献レビューを合冊し、一年間をふり返った総括を添付し、一年間の学びのレポートを提出する。また、受講者全員で企画実施する活動報告を兼ねたミニシンポジウムを2月または3月に開催し、陣内プロ研の完了となる。

【メインプロジェクト】

- ・ひろのカフェプロジェクト（福島県いわき市内に

設置された応急仮設住宅の集会所での仮設カフェの開設と運営、1～2回／月、2014年度で終了）

- ・湯ノ花集落活性化プロジェクト（福島県南会津町湯ノ花地区の活性化を地元自治会などと協力して展開、2016年度で終了）
- ・平石地区コミュニティインターンプロジェクト（栃木県宇都宮市平石地区にて地元自治会などと協力して地域活性化活動を展開）



写真1 平石地区「いどばたカフェ」の開催
(2015.12.20 平石地区市民センターにて、筆者撮影)

- ・K社CSR活動（栃木県宇都宮市に立地するK社のCSR活動を協働で運営）
- ・多世代交流型居場所づくりプロジェクト（栃木県宇都宮市の社会福祉法人と協力して多世代交流型居場所の立ち上げ運営を展開）
- ・UST子どものまち（「子どものまち」の企画運営及びサポート）など

【サブプロジェクト】

- ・栃木県地球温暖化防止活動推進センター、宇都宮市環境学習センター、道の駅やいたエコハウス（栃木県矢板市）、まちかど美術館（栃木県小山市）、コミュニティカフェ「ソノツギ」（宇都宮市）など

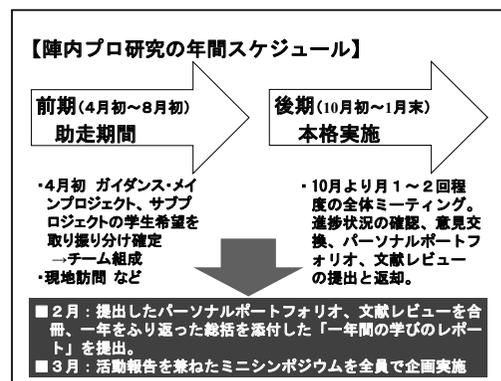


図1 陣内プロ研の年間スケジュール

3. ポートフォリオ学習に関する調査分析

(1) インタビュー調査について

上記のように、陣内プロ研では、パーソナルポートフォリオと文献レビューの定期的な提出が求められる。ポートフォリオの様式は自由であるが、活動内容、活動の様子が分かる写真、考察は必須である。加えて、活動と関連した研究論文をレビューすることが課せられている。ポートフォリオへの意欲や効果などを検証するため、受講者を対象に半構造化インタビュー調査を行った(表2)²。対象者は、インタビュー調査に同意してくれた現3年生で昨年度も受講した学生4名(環境創造3名、地域公共1名)である(2名A、B:平石地区コミュニティインターン、1名C:多世代交流型居場所づくり1名、1名D:2年次湯ノ花地区、3年次UST子どものまち)。なお、総合人間形成課程は2016年度以降募集停止のため、今年度の受講者は3年生のみ16名である。

表2 インタビュー調査の概要

| |
|--|
| ・実施時期 2017年10月 |
| ・主なインタビュー項目 |
| ① プロジェクト研究への取組の意欲 |
| ② 2年次と3年次の意識の変容 |
| ③ ポートフォリオに対する意欲や意見、ポートフォリオの効果など |
| ④ 文献レビューに対する意欲や意見、文献レビューの効果など |
| ・調査員(1名)によって、対象者一人ずつ個別にインタビューを実施。対象者の同意を得てICレコーダーに録音し逐語録を作成。 |

(2) 調査結果の概要

1) プロジェクト研究について

プロジェクト研究については、4名とも積極的に取り組んだと自己評価している。2年次当初は何をすべきか道筋がみえず不安であったという者もいたが、面倒をみてくれる3年生がいたことで不安が消えたようである。加えて、当該学生はチーム内での役割が明確になり、地元住民から声をかけてもらったことから、自信をもって活動に参加できるようになったということであった。

4名に共通しているのは、2年次の活動を通して地元住民や関係者などとの“つながり”を感じるようになってきていることである。(2年次で湯ノ花地区での活動が終わった学生が、活動の終了を強く残念がっていたのが印象的であった。)

表3 逐語録要約の抜粋

【学生A】平石地区

・ポートフォリオは、正直面倒くさいと最初は感じた。しかし、ポートフォリオがあったからこそ、活動するモチベーションが高まった。活動しないとポートフォリオに書けることがないし、何よりもカタチに残ることで「やった感」があるし、やりがいに繋がった。

【学生B】平石地区

・平石プロジェクトではイベントを企画実施することが多い。そのため、記録に残していくことが企画実施していく上で重要であると感じている。
・大人との関わりのなかでそれなりに専門性を要求されていると痛感する。そういう時はよいものにしていこうという気持ちになるし、ポートフォリオに記録することで、使命感みたいなものが高まってくるし、達成感もある。
・記録するコンテンツがなければポートフォリオを書けなくて困ってしまうこともあり、しっかりと活動しようという気持ちになる。
・ポートフォリオをふり返ることで、反省することが多々あるし、よりよい活動へ向けての気付きがある。

【学生C】多世代交流型居場所

・ポートフォリオは、きちんと記録に残ることから達成感があるし、最終報告会(ミニシンポジウム)の際は本当に役に立つ。
・正直言って面倒くさいが、活動の振り返りや工程管理において重要である。
・陣内プロ研では自主的な活動が求められていることから、自主的に活動を進める、つまり、活動のモチベーションにはなっていると思う。

【学生D】湯ノ花・UST子どものまち

・ポートフォリオがあることで、活動や文献レビューを積極的に取り組む方向に気持ちが向かっていると思う。ポートフォリオがなければ、今ほどやる気はでてないのではないかと。
・ただし、以上は2年生の経験があるから言えることであり、2年生の初動段階ではパーソナルポートフォリオと文献レビューに関する(教員からの)丁寧な説明(方法など)が必要であったと感じている。



写真2 多世代交流型居場所の様子
(2017.8、調査協力者撮影)



写真3 UST子どものまちの様子
(2018.2.18、筆者撮影)



写真4 湯ノ花集落活性化プロジェクト・花見会
の様子 (2016.5.5、筆者撮影)

2) ポートフォリオについて

ポートフォリオに関するインタビュー調査結果の要約は表3のとおりである。高浦(2001)によれば、ポートフォリオは誰によって収集されるかにより student portfolio と teaching portfolio に分けられ、前者は学習者によって学習内容や振り返り等が収集されるものである¹⁾。陣プロ研のポートフォリオは学生個人が取りまとめるものであり、表3の抜粋

を見る限りでは、student portfolioとして機能していると推察される。

また、活動内容とその考察をポートフォリオに記録することが、活動をよりよいものにしていこうというモチベーションにつながっていることも分かる。学生Bが指摘しているように(表3アンダーライン)、「実践の共同体の中」³⁾で自己変革していく様子が見て取れ、その変容をポートフォリオに記録しふり返ることで活動への意欲が高まっている。つまり、能動的な気持ちを高めることにプラスに作用していることが分かる。

3) 文献レビューについて

活動と関連した研究論文のレビューについては、「何故この活動に取り組んでいるのか」への回答を見出すことができる(学生A)、活動の意味や意義が分かる場合がある(学生D)など、文献レビューをポートフォリオと連動させることで活動へのより深い認識につながっていることが推察された。ただし、活動と関連する文献そのものを見出すことの煩雑さなどを指摘する者もいた。

以上のように、ポートフォリオが能動的な活動や学びを誘発する上で一定の効力を発揮したことが示されたが、初動段階でのポートフォリオ、文献レビューに関する十分な説明が必要であることも示唆された。

4. まとめ

(1) ポートフォリオ学習と地域プロジェクト型学習 —ディープ・アクティブ・ラーニングの可能性—

逐語録より、受講者の能動的学習への意識変容を示すキーワードを抽出し、出現頻度(合計値)を整理した。②、③は学生としての実利的な視点であるが、①、④、⑤はプロジェクトに関わる受講生の変容が読み取れる。

表4 ポートフォリオの効用

| | |
|------------------|-----|
| ① 活動へのモチベーション | 16回 |
| ② 課題としての義務感 | 12回 |
| ③ スキルや実務上の利点 | 10回 |
| ④ 達成感 | 9回 |
| ⑤ 情緒的な作用(気持ちの高揚) | 7回 |

筆者がプロジェクト研究を担当した当初、進め方については手探りの状況であった。月1~2回の全

体ミーティングでの活動状況の口頭報告、学期末の振り返りのレポートの提出のみが学生に課された具体的な課題であり、「活動に始まり活動で終わり、そこに学びはあるのか?」というのが大きな疑問であり悩みでもあった。そのため、月1～2回の全体ミーティングでのパーソナルポートフォリオと文献レビューの提出、学期末における振り返りレポート(最終レポート)の提出とミニシンポジウム(報告会)の企画実施を課すことにした。

以上の改善により全ての受講生が能動的な学びを獲得できたかどうか、今回の調査研究で明らかにすることはできなかった。しかしながら、少なくとも調査対象となった受講生からは、ポートフォリオを定期的に提出し、教員(=筆者)との往還があることで、活動へのモチベーションや達成感につながっていることが明らかとなった。

前述のとおり、政府の地方創生の旗振りもあり、わが国の大学には地域貢献が強く求められている。そのような中、プロジェクト研究のように、地域で活動しながら学生が学びを深め併せて地域貢献するという地域密着型の授業が目ざされている。このような地域活動、地域密着型の授業=地域プロジェクト型学習は、アクティブ・ラーニングの要素が濃いと言えよう。「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだして能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」と2012年8月の中央教育審議会答申は述べている。であるならば、アクティブ・ラーニングとして、地域プロジェクト型学習がよりよい学び、より深い学びへと進化するあり方を模索することが重要である。

ポートフォリオ学習によって、受講生は活動へのモチベーションや達成感を高め、併せて社会人とのコミュニケーション、企画書作成、打ち合わせ会議の進行と資料作成などのスキルも習得していた。ディープ・アクティブ・ラーニングは、「①生徒・学生が他者とかかわりながら、②対象世界を深く学び、③自分のこれまでの知識や経験と結び付けると同時に、これからの人生につなげていけるような学習」と定義されているが²⁾、上記のとおり、ポートフォリオ学習はそのような学びのきっかけになっていることも示唆された。

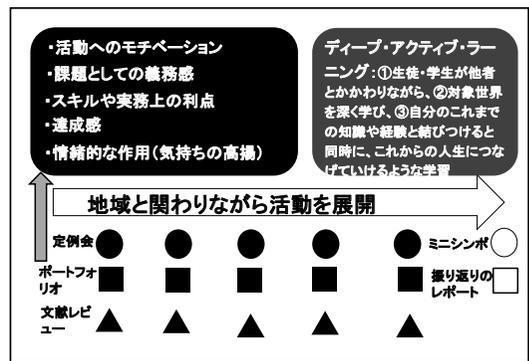


図2 ポートフォリオとディープ・アクティブ・ラーニングの関係

(2) ポートフォリオ学習と地域プロジェクト型学習 —課題—

ポートフォリオの往還が学生のやる気を引き出し、より深く考えるきっかけとなったことが示唆されたが、地域プロジェクト型学習では、それ以外の要因も大きいことに留意することが必要である。何よりも重要なのは、受講生が数ヶ月間にわたって関わることになる地域活動そのものが、受講生にとって魅力的であるものかどうか、ということが問われる。併せて、地域とその住民にとって、受講生を受け入れることがプラスに作用するのか、ということも悩ましい点である。また、担当教員への負担がかなり大きいことは言うまでもない。

総合人間形成課程プロジェクト研究は必修科目であることから、もともと地域プロジェクトに関心がない受講生が一定数いることは否定できない。そのような学生にとってポートフォリオ学習がどのように作用したのかは明確ではない。ただし、筆者の経験から言えば、プロジェクト活動に対する姿勢は受講生の間に相当の開きがあり、もともと意欲が低い学生の関心度を高める点でポートフォリオが有効だったのかということについては疑問が残る。

(3) 今後の研究の課題

インタビュー調査の対象が4名と限定されていたことから、今後、対象者を増やすとともにテキストマイニングなどにより分析を深めることが必要である。

(補注)

1 ポートフォリオ学習について、蔭山は「自律学習能力や学習に対するメタ認知能力の向上を目指す学習者参加型活動」(蔭山峰子(2010)「ポ

トフォリオの要素を取り入れた自律学習の実践」
『同志社大学日本語・日本文化研究』第8号所収、
pp.75－88）と定義している。

- 2 国立大学法人宇都宮大学ヒトを対象とする研究に関する倫理規定（2008年制定）に基づき、インタビュー調査の実施に当たって倫理的に配慮した。また、ICレコーダーによる録音について、インタビュー実施時に改めて本人への確認を行った。
- 3 蔭山（2010）は、実践の共同体の中での学びについて次のように指摘している。「認知心理学に基づく教育観・学習観は、ヴィゴツキーに代表されるように、学習者を知識の受け皿として見るのではなく、教師、実践の共同体などの他者や環境との相互行為に参加（解釈、検証、批判）する存在、つまり実践の共同体の中での問題解決を図り、自己他者を評価しながら変化していく存在としてとらえている。」（p.77）

（参考文献）

- 1) 高浦勝義（2001）『ポートフォリオ評価入門』明治図書、p.13
- 2) 佐伯胖、藤田英典、佐藤学（1995）『学びへの誘い』東京大学出版会

平成30年3月26日 受理

An Analysis of Portfolio Learning : A Case Study of Community-based Project Curriculum

Yuji JINNOUCHI